

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	岡倉秋水伝
Author(s)	岡倉, 日出夫
Citation	五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要(16): 17-47
Issue Date	2009-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10109/1072
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

【論 文】

岡倉秋水伝

岡倉 日出夫

はじめに

岡倉天心(覚三、一八六二―一九一三)には、六歳年下の岡倉秋水(覚平、一八六八―一九五〇)という甥がいた。初め外国語学校でフランス語を学んでいたが、生来絵が好きで、途中から狩野芳崖に弟子入りして、秋水と名乗った。

秋水の記録は、岡倉一雄著『岡倉天心をめぐる人びと』(中央公論美術出版)や、『東京芸術大学百年史 東京美術学校編』、『日本美術院百年史 美術院前史』等に、若い時期のことが載っているが、それ以後どのような生涯を送ったか、あまり知られていない。

彼は、師の芳崖が、東京美術学校開校(明治二十二年)直前に病死してから、美術学校に一期生で入学した。入学前に、鑑画会大会(展覧会)で褒賞を得たり、在学中に楠正成銅像の懸賞図案に当選するなどして、早成の優等生だったようだ。

秋水は二年時の秋、突然、盟友の岡不崩とともに美術学校を退学して、女子高等師範に、岡は高等師範に、それぞれ毛筆画指導教員として派遣される。これは天心の要請を受けての事だった。

その後学習院に移って、以後教員生活が長く続くが、画家としての活躍の時期もこれに重なる。日本青年絵画協会の中心メンバーで、審査員でもあった。

しかし明治三十年頃から、美術学校で研鑽をつづけた画家たちが力を付け、今日にも繋がる新しい画風の日本画が台頭してからは、狩野派の墨跡を守る秋水などの絵は、次第に押され気味になっていった。

日本美術院創立に加わる事はなく、天心からも離れた。

反骨の気風を多少持つ秋水は、終生、狩野芳崖師を尊敬し続け、かつての門下生たちと、日月会、狩野会などを興して、狩野派の普及にとめた。若い頃、天心の運動を支えながらも、最後は自分の道を行んだ秋水のような生き方も、明治期の美術史を広く見渡す上で、参考になるのではないだろうか。

筆者はその秋水の孫だが、祖父と暮らしたのは七、八歳の頃で、記憶で語れるのはごく僅かである。我が家に残る資料としては、秋水遺品の数々と、筆者の父輝夫自筆の「岡倉秋水経歴」、「わが私たちの記」がある。特に後者は、当時の様子を今に伝えて興味深い。また相続の戸籍謄本も貴重だった。あとは書籍、外部文書等だが、学習院に保管されていた秋水の履歴書は、この伝記の骨格になる。

一、生いたち〔覚三との関係・相次いで福井を後にする〕

岡倉覚平は慶応三年十二月十一日(一八六八・二月)、福井県福井市老松下町で、(清水)寛裕(かんゆう)(戸籍には官一と記載、一八三八―一八三三)、岡倉なか(仲、一八四五―一九一九)の次男として生まれた。他に長女ふき(富貴、一八六一―一八八八)、長男一郎(一八六五―一九三二、ドイツ語学者)、次女ゆり(百合)がいる。翌慶応四年九月には明治元年になるという、戊辰戦争の争乱の中だった。

母仲の父は、岡倉勘右衛門(一八二一―一八九六)で、藩政時代には福井藩士であり、理財に長け、書・俳諧にも通じていた事から藩主松

平春嶽に認められて、時期は不明だが藩命で横浜に赴き、生糸貿易の店舗石川屋の支配人となった。福井では、初婚の妻みせ（藤田氏）との間に二男六女をもうけたが、四人が夭折して仲（覚平の母）、よし、ひやく（百）、せん（仙）の四人が成人した。

横浜にきて間もなく、妻みせが郷里で死去（一八五九）したので、福井三国の野畑この（一八三四〜七〇）を後妻にむかえた。このとの間には長男港一郎（一八六一〜七五）が生まれ、つづいて後に天心となる覚三が生まれ、三男玄三が夭折して四男由三郎（一八六四〜一九三六 英語学者）が生まれた。そして末子ちよう子（蝶子 一八七〇〜一九四三）が生まれた後、このは急逝してしまう。

これ以後の天心方の岡倉家については、『岡倉天心をめぐる人びと』他多数の著書で詳しくのべられているので、これ以上は述べない。

勘右衛門に続いて、覚平の一家もまた福井をあとにするのだが、その時期もはつきりしていないし、行き先が横浜か東京かについても両方の記述が我が家には残っている。

しかし真実味があるのは「わがおいたちの記」の方である。

・・・維新の折り、一家をあげて東京（まだ江戸と言っていたかも知れぬ）へ出てきた。福井から江戸まで随分遠い道のりである。何台も駕籠を連ねての道中であつたそうだ。駕籠の中で退屈仕切つた父（覚平）が、田の中に餌を漁っている白鷺を見て、あれを取ってくれと駄々を捏ねて、皆をこまらせたものだと、聞かされたことがあつた。

秋水一家が東京に出てきて住んだのは、神田淡路町一丁目一番地の家だが、いきなりその家に入居したとは思いいくない。当時のことだから、一旦は勘右衛門をたよって、自立のめどが立つまで、しばらくはそこに身を置いたのではないだろうか。

『岡倉天心をめぐる人びと』には次の記述¹⁾がある。

勘右衛門は明治七年、覚藏名義で宿屋兼越前物産取り次所を開業、家族・親族・雇人などあわせて二十余人が住んでいた。

ここでの親族とは、覚平の家族を指すのではないだろうか。我が家に長い間、その宿屋で使っていたという、桐に螺鈿入りの火鉢二つと、上等そうな座布団が数枚あつたのを覚えている。その宿屋は日本橋蛸殻町にあつたと聞いている。

二、書生時代〔外国語学校中退、狩野方涯に入門、東京美術学校入学〕

ここで、学習院本部に保管されている秋水の履歴書を示す。

（女子高等師範学校の履歴書は震災で焼失とのこと）

福井県士族

東京市神田区淡路町壱丁目一番地

岡倉 覚平

号 秋水

慶応三年生

- 一 明治十一年四月元東京外国語学校仏蘭西学部ニ入学
- 一 同 十三年九月依願退学ス
- 一 同年同月ヨリ故狩野芳崖師ニ就キ絵画ヲ修行ス
- 一 同十六年帝国大学元雇教師米人「フェノロサ」氏ニ就キ美学ヲ専攻ス
- 一 同二十年四月全国宝物取り調ニ際シ九鬼元図書頭ニ従行シ京都奈良紀州ヲ遊歴ス
- 一 同二十二年二月東京美術学校ニ入学
- 一 同二十三年楠公銅像懸賞図案ニ当選シ帝国博物館ヨリ一等賞ヲ得
- 一 同年七月依願退学ス
- 一 同年同月東京女子高等師範学校ヨリ隔日ニ絵画ノ授業ヲ囑託セラル(但シ手当トシテ一ヶ月金二十円ヲ給与セラル)
- 一 同二十七年依願囑託ヲ解カル
- 一 爾來専ラ絵画及ヒ工芸図案ニ従事ス

右之通りニ御座候也

明治廿九年十一月

岡 倉 覚 平

秋水が狩野芳崖に弟子入りした経緯については、『日本美術院百年史、美術院前史』^②の中で秋水自身が、芳崖の「仁王捉鬼図」制作の由来を述べる中で触れている。長文なので部分のみを紹介すると、

・ ・ ・ 其ノ苦心ハ遂ニ明治十八年ヨリ二十年ノ三ヶ年(私註、一九年までの八ヶ月)ニワタリタルモノニシテ、色ハ仏国ヨリ原料ノ粉末トナル絵具ヲ取り寄せ使用セラレ(此間ニヶ月ヲ休ム事アリ)稿ヲ起コセシハ春頃ニテ、小生ノ家トハ一ツ井戸ノ水ヲ呑ミツツ近キ關係ヨリ弟子入りセシモノニテ、左ニ如キ家ナリシガ、四五年前其ノ家ハ取り払ハレタリ。(図あり)

この記述の通りだと、弟子入りしたのは明治十八年頃と受け取れるが、履歴書とは随分ひらきがある。それと秋水が入門した明治十三年当時の芳崖は、芝新堀町の粗末な家で、島津家から「犬追物」制作の注文を得て、やっと極貧状態から抜け出たところで、神田淡路町にはまだ引越していない筈だが、どうなのだろうか。

フェノロサが東大教授に着任したのが明治十一年で、日本の古画研究に乗り出した時に通訳をつとめた学生の一人が天心である。後年岡不崩はこう回顧している。

・ ・ ・ 岡倉は画がすきで、大学を卒業してから自分で少しハやつたが余り味くハいかぬ、そこで自分の内に居る書生に画を習はした。

(『日本美術院百年史 一卷下』^③)

叔父覚三は学生のうちに大岡基子と結婚して、東大を卒業後文部省に入り、独立してから自宅に書生を置くようになった。覚平も叔父の

下で長く書生時代を送っているので、真相は、天心はフェノロサの通訳をつとめるうち、かなり早い時期に狩野芳崖を知って、覚平に弟子入りを勧めた、という所ではないだろうか。この件は疑問という事にしておく。

明治十六年、秋水は父寛裕を亡くした。父四十五歳、秋水十五歳の時である。兄一郎はまだ東京外国語学校独逸語科で勉学中であり、家計は苦しくなったと思われる。秋水が天心の下で書生をしていたのも、母仲の肩にかかった家計を助ける意味があったかも知れない。

履歴書では同年、フェノロサに就いて美学を専攻した、とあるが、秋水にとってフェノロサは、理論面での指導者で、鑑画会を通して大きな影響を受けた。「鑑画会」という組織は、明治十七年二月に、刀剣商の町田平吉という人を会主とする七人の会員で設立された。同年一月初旬、町田がフェノロサのコレクションを見て、これを陳列した展覧会を開いて、公衆の益に供しようと考えたことが発端だそうだ。

鑑画会は、他にフェノロサ教授の講義や古画の鑑定も行ったが、明治十七年四月以降組織改革をへて、河瀬秀治を新会長として体制を新たにした。活動は「鑑画会大会」という、今日でいう公募展を開くとともに、日本画家の育成と画学教育を中心にして、以後、東京美術学校開校による自然消滅までの四、五年の間に、日本画の革新を推進する、教育機関の役割を果たしたのである。

明治十八年の第一回鑑画会大会には、橋本雅邦も狩野芳崖も、岡倉秋水も同門の弟子たちも、また他流の画家たちも出品して腕を競った。

結果の祥述は省くが、芳崖の弟子山本松溪「冬山暮景」が二等

(二〇円)、狩野芳崖「伏龍羅漢」(他二点)と、橋本雅邦「山駅秋色」(他一点)が、ともに三等(五円)、岡倉秋水「鷺」(他二点)が四等(二・五円)と言う、審査結果であった。

秋水のように美術学校以前に画門に入った若者たちにとっては、鑑画会は学校のような存在だったろうし、フェノロサが『美術真説』で説いた内容は、西洋人が説く美学ということで、格別に彼らの心を捉えたのではないだろうか。

ここで、フェノロサの『美術真説』の主な主張を要約してみると、日本・東洋の絵画は西洋画のような陰影や投影を用いず、線を主な表現手段にしている。線は実世界には無いものであつて、それは優れた画家の思想(観念)を直接的に表している。従つて日本・東洋画の方が真の芸術性において優れている。しかし南画は詩と絵画を混同して、本当の絵画芸術ではない。これに対して西洋画は、写実に精力を費やして、色彩も煩雑で、結果として物的世界を逡巡していて、なかなか精神世界に人を導き得ない。従つて、日本・東洋画の方が勝っている。と言うことになろうか。

そしてこれからの日本画の課題として、狭い流派や伝統に縛られず、日本画の技法の中で研鑽を積むべきだ、としている。ただ実際の指導においてフェノロサは、必要なら西洋画の技法もとられる立場をとつていて、これは美術学校と、美術院の画家達の特徴ともなつて行く。

さて、秋水が入門した狩野芳崖とはどのような人だったのか、簡単に紹介してみよう。

芳崖は文政十一年（一八二八）一月十三日、長州豊浦（山口県長府）の生まれ、父は豊浦藩のお抱え絵師狩野晴暈である。芳涯は二十前後の時江戸に出て、幕府絵所の絵師狩野勝川院雅信の画所で絵を学んだ。塾は木挽町にあった。芳崖は次第に腕をあげて、ほぼ同じ頃入門した橋本雅邦と並んで頭角をあらわし、勝川門下の二高足として特別の地位に就いた。江戸っ子の雅邦は芳崖より七歳下で淡泊な性格だったが、長州人である芳崖は熱狂的で、これは親ゆずりの性格だった。画風も、雅邦の静的で穩健古雅なのに対して芳崖の絵は動的で奇矯を極め、しばしば醜怪な世界に踏み込んだ。芳崖は勝川門で塾頭の地位に就いたが、十年にして郷里に帰った。

数年後、江戸城が火災を被り、その修復のために呼び戻されたが、幕末の動乱にあたり、長州人は国元に帰って藩の軍事にあたり、芳崖もそれに加わって国元に帰った。

明治十年十月、芳崖は再び画家としての再起を期して、妻をともな上京した。五十歳の時である。時勢は一変して欧化主義が人心を捉え、社会のすみずみに浸潤していた。政府の神仏分離政策も影響して仏教の価値ある文物が壊されたり安値で売りに出されたり、伝統の権威や価値が失墜していた。狩野派、土佐派、四条派などの伝統絵画は旧来の庇護者を失って、それらの画家が絵で生きることが不可能であった。しかし南画は不思議なくらい流行っていた。芳崖も当然生活苦にあえぐことになった。旧友橋本雅邦と励まし合いながら、賃仕事で糊口を凌ぐうち、雅邦から島津家の「犬追物」の制作を斡旋され、月給二十円を支給されて、やっと画家本来に立ち返ることができた。「犬追物」は明治十二年から三年間を費やして完成したが、覚平

はこの間に入門したことになる。

明治十七年の内国絵画共進会に出品した作品がフェノロサの目にとまり、その訪問を受けることになった（明治十五年頃という説もある）。以後雅邦とともに世に認められる所となり、天心・フェノロサたちの日本画を振興する美術行政運動に加わり、文部省の図画取調掛嘱託として、東京美術学校設立のために力を注いだ。

この間、鑑画会大会を舞台に活躍し、「伏龍羅漢」、「仁王捉鬼図」など傑作を生みだし、絶筆「悲母観音像」を完成させた後、美術学校開校直前の明治二十一年十一月五日午後、病没した。六十一歳だった。芳崖は美術学校教員をを約束されながら、果たせなかったが、この後は橋本雅邦が主導的立場にたつた。

狩野芳崖が、いつ頃から弟子を採るようになったかは、秋水以外はつきりしていないが、鑑画会大会などで師とともに腕を競った、芳崖門下の四天王と称される弟子たちがいて、岡倉秋水、本多天城、岡不崩、高屋肖哲、及び山本松溪たちである。

狩野友信談の、芳崖の門人評に次のような話がある。

秋水は村正だ。極よく出来るが絵で人をきる奴だ。肖哲は正宗だ。決してひとをきららない。果たして秋水は世に売れて、肖哲は蔵くられて、人に知られない。この肖哲といふ男が不思議な画を描きました。馬が虎を追ひかけて噛みついた図で、芳崖は大に之を賞嘆して、此画以来は高屋と呼ばずに馬虎（バコ）々々。

其人物の大まかなのを賞して一番のお気に入りであったが、今

日は不遇の境に居るやうです。

〔日本美術第81号〕

芳崖が明治十七年に普通教育における、図画調査会委員、十九年に美術学校設立のための図画取調掛嘱託となるにおよんで、門下生たちも師とともに、天心、フェノロサたちの運動を支えるようになった。

明治二十年十月、東京美術学校設置が公布されたが、国粹主義の勢力が常に優位を保っていたわけではない。当時の文相、森有礼は西洋式と日本式に優劣をつけない考えをもっていて、日本画と西洋画の対立はまだ続いていた。森文相が翌年、天心らの構想とは別の、西洋式と日本式並置の美術師範学校設置案を出してきたのは、西洋派の巻き返しだった。『東京芸術大学百年史 東京美術学校編』には、高谷尚哲の次の証言が載っている。

明治廿一年二月頃と思ひました。岡倉寛三氏より秋水、肖哲二人を呼び寄せての話に曰く、明日の談判に破裂せばお互いに乞食せんならんと言ひ渡されましたが、此時フェノロサ氏の妻君はある園遊会にて伊藤公に逢ひて美術学校の創立談を説きつけ、芳崖師は伊藤公の邸に到り応接室にて……

秋水にも、肖哲にも、美術学校のなりゆきは生活の問題でもあった。芳崖の伊藤総理への直訴によって、事態は好転して天心たちの構想で決着した。

同年春から秋にかけては、古美術保護行政推進のための、大規模な

古社寺宝物調査が敢行された。宮内省図書頭の九鬼隆一ら政府高官を筆頭に、天心、フェノロサ、ビゲロウ、今泉雄作他各分野の専門家多数、新聞社特派員も加わって、五十日間の予定で、和歌山、奈良、京都と進んだ。この調査団に、東京美術学校関係者も大挙して参加したが、岡倉秋水、岡不崩および高屋肖哲の門下生たちも随行している。

秋水ら芳崖の門下生たちにとって、希望にみちた時期だっただろうが、狩野芳崖は絶筆「悲母観音」を小石川植物園の図画取調掛の一室で完成させた後体調を崩し、同年十一月五日、小川町の自宅で没した。芳崖は上京後の生活苦の中で胸を病み、大蒜にんにくを摂ることで乗り切ってきたので、丈夫でないことは分かっていたが、それでも師の急死は、門人たちにとって、そして天心にとっても、大きな痛手だった。しかし明治二十二年二月、東京美術学校開校には、高屋（疋田）肖哲、本多天城、岡倉秋水、岡不崩の四天王も一期生で入学した。その中には、後の横山大観、下村観山らもいた。

三、活躍の時代〔楠公銅像図案入選、美術学校退学、毛筆画教員、画壇での活躍〕

東京美術学校第一期生六十五人の中には、四天王や、雅邦門下の観山のように既に修行を積んできたものもいたが、一方横山秀磨（大観）のような大学予備門から転向してきた異材もいた。

明治二十三年（一八九〇）、住友家は別子銅山開坑二百年記念の祝賀に際して、ここから産出した銅を用いて銅像をつくり、宮中に献納したいと思いついた。その制作が東京美術学校に委嘱され、当時の校

長岡倉天心は、製作主任に高村光雲を任命して協議の結果、楠正成の騎馬像を作る事がきまった。その図案は学校内の教員、生徒から募集しようということになり、その結果、岡倉秋水の楠正成騎馬像図案が採用になった。

右手で手綱を引き、やや顔をうつむき加減にしている図は、元弘三年四月、隱岐から還幸した後醍醐天皇を、金剛山の囲いを破って兵庫の道筋まで出迎えた時の姿だそう。現在も皇居前の広場に建っている銅像がそれである。製作にあたっては、正成の容貌はじめ、鎧・兜、太刀・具足にいたる細部の時代考証にかなりの苦勞をしたということである。四年を経て檜の原型ができあがり、更に鑄造に六年を要して、明治二十三年七月十四日に宮内省に引き渡された。

秋水遺品資料の中に、須賀利雄「楠公銅像製作の由来」(『美術研究』第七十三号抜刷 昭和十三年一月)という冊子があり、中に秋水の談がのつていて興味深いので紹介する。

「明治十八、九年頃、フェノロサ氏主催の鑑画会に時折図案募集あり、是に応募し入賞もして居た。依つて試みに一図作成出品せし所意外にも当選一等金参拾円を受けた。而して、其事務取扱ひは東京帝室博物館が是に任じ、賞金授与の際は、学生の身でありながら車を駆つて、意気揚々と博物館に赴いた」

さて、師狩野芳崖を失つた悲しみを乗り越えて入学した東京美術学校だったが、秋水の身に思いがけない転機が訪れた。

フェノロサ、天心らの国粹勃興の美術行政運動は、美術の本質に

ついて中国と日本の古典を深く研究した上での信念に基づいていたので、西洋画を排除した東京美術学校の設立だけで終わるものではなかった。美術学校創設の後まわしになつてきた、普通教育の図画の革新にも着手した。

明治十七年、文部省に設置された図画調査会で、普通教育においての、毛筆使用を主張する天心たちと、鉛筆使用をよしとする洋画家の小山正太郎たちが対立したように、それは国民レベルの美術教育にも向けられていったのだった。

明治二十三年七月、秋水と岡不崩(吉寿)の二人は、突然依願退学をして、同月、秋水は女子高等師範学校に、岡は高等師範学校に、それぞれ毛筆画指導の嘱託教授として赴任した。

これは、当時の文部省内の、西洋派と国粹派の力関係の変化で、時期有利と読んだ天心が、この二人を選んで要請したからだった。

この事実は筆者もごく最近まで知らなかったし、『東京芸術大学百年史』にも、二人について、「学籍簿現存せず」と記されているのみである。

ところで毛筆画教育は、明治二十三年頃から、漸次鉛筆画教育を圧迫し、明治二十六年頃から十年間を最盛期として全国に広まったと言ふことである。とにかく、秋水は二十円の月給を得て独り立ちをした。二十三歳の時だった。

美術学校での、更なる研鑽はできなくなったが、芳崖門での修行と、鑑画会での経験を力に、一人の日本画家として、作品を世に問うて行くことになつたのである。

ここでは、まず、秋水がどのような絵を描いていたかを、述べてみよう。遺品のほとんどは、薄紙に描かれた毛筆の画稿で、他に軸装作品、軸装前の作品（まくり）、色紙、スケッチブックに描かれた鉛筆の画稿等だが、内容は山水図、羅漢・布袋などの道釈図、武者絵など、まさに狩野派の古画である。

今日の我々の目で見れば、時代感覚に合わない絵が多いと言えるが、今から百年も前の世には、自然な感覚だったのだろう。

同じ日本画でも、横山大観、菱田春草、下村観山らに代表される美術院系の作家と、竹内栖鳳など京都の丸山派、四条派系統の画家たちの絵は、色彩が豊かになり、現代の日本画に直接繋がっている。これは明治の三十年代から四十年代の間に、日本画界で新たな台頭があり、世代交代があったからで、秋水は、歳は大観と同じだったが古い世代に属していた。秋水だけではなく、芳崖の門下生だった画家たちも、ほぼ同様であった。

以上の事柄を念頭に置いて、多分に羅列的になるが、秋水の活躍を辿ってみたい。（秋水以外は同門のみ併記）

◎（明治十八年の第一回鑑画会大会については前述）

◎明治十九年四月十五日～十八日第二回鑑画会大会⁸ 柳橋萬八楼

一等賞（五十円） 狩野芳崖「仁王ノ図」

賞状 岡倉秋水「山水」

岡又太郎（不崩）「山水」

本多祐輔（天城）「山水」

◎東京勸業博覧会（第三回内国勸業博覧会のことか）

同二十三年四月一日～七月三二日 東京上野公園

三等賞入賞

◎同二十四年九月日本美術協会の若手が独立して日本青年絵画協会が発足、秋水も中心メンバーの一人になる。¹⁰

◎同二十五年十月十五日～十一月十日第一回青年絵画共進会¹¹ 東京美術学校交友会倶楽部

秋水審査員となる

◎同二十六年四月一日～二十日第二回青年絵画共進会¹² 上野公園内

国商品陳列館

審査員

◎同二十七年五月一日～六月五日第三回青年絵画共進会¹³ 上野公園旧

博覧会五号館

審査員

二等褒状を受ける「義家知伏図」

◎同二十八年四月十日～五月二十日第四回青年絵画共進会¹⁴ 上野公園

五号館

審査員

◎同二十九年九月二十〇十月三十日 日本絵画協会第一回絵画共進会
上野公園五号館

第三部二等褒状を受ける 「秋溪猛鷹」

入選 「真如叢雲」

(本多天城) も二等

この日本絵画協会と言うのは、天心傘下での東京美術学校から菓立ち始めた、横山大観、下村観山などの、所謂学校派(新派とも称する)に活動の場を与えるために、もともと日本青年絵画協会会頭だった天心が組織替えをしたもので、三つの部門にわけた。即ち、

第一部 東洋画の画法を維持するもの

第二部 西洋の様式に基づくもの

第三部 従来の画法にかかわらず、新たに開発を謀らんとするものであった。天心の焦点は言うまでもなく第三部にあった。

第二部は、つまりは西洋画だった。第三部には当然ながら下村観山、菱田春草、横山大観、木村武山ら天心のもので育った画家たちが賞を得ているが、そこに秋水も入っているのは、努力の賜物ではないだろうか。なお、本多天城は美術学校を卒業して助教にもなっている。

日本絵画協会はその後、学校派に反発した勢力が脱退して「日本画会」を結成した。秋水もその方に移ったものと思われる。

◎ボストン美術館に収蔵の秋水作品(二点、内一点は後に売却)

池田半遊鴨図 一九一一年登録 ビゲローコレクション

遠山暮溪 一九一一年

A god with three horses on clouds (一九三二年売却)

一九一一年登録 ビゲローコレクション

秋水の作品発表の記録は、明治二十九年の日本絵画協会第一回絵画共進会以後は見当らなくなる。この頃から、新派と呼ばれる学校派・京都派の絵が展覧会の主流になって行き、日本画会など旧派は独自の展覧会をもって対抗する事になるので、結局秋水もその側に立つようになったのかも知れない。

明治三十一年三月に、美術学校騒動が起きて、天心が校長非職となるや、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、寺崎広業、下村観山など、教授、助教授陣(最終的に十七名)が連袂辞職する事件が起きた。

天心は彼らとともに谷中に日本美術院を創立し、十月に開院式を挙げた。この美術院を舞台にして、新しい日本画が生み出され、それは揺るぎない流れとして今日に繋がっているが、同時に天心のもとに集まった画家と、離れた画家の、それぞれの行く末も決したと言えるだろう。

四、神田淡路町の家(叔父との別れ、学習院助教、秋水の反骨、芳崖遺墨集、関東大震災)

明治二十七年、秋水は女子高等師範学校を依願解職されて、約三年間、絵画や工芸図案を業としたと履歴書にあるが、事情などは分からない。この頃は神田淡路町の実家にいたものと思われる。

秋水の母仲には、実の妹よしがいたが、八杉純（裁判官）と結婚して、女子貞（一八六九〜一九一五）と、男子直（一八八七〜？）を生んだ。八杉氏は、秋水方の家系になるが、資料等で想像すると、天心家との付き合いの方が多かったようだ。直は長じて横浜で銀行家になり（後に三菱銀行監査役）、後年日米間を行き来するようになった天心とは、仕事上のつながりもあつたらしい、と言うことである。

天心家の方に、和田三郎という人物がいる。三郎は明治二十八（一八九五）年七月、天心を父として、八杉貞を母として生まれた。筆者はそのいきさつらしい話を聞いた事もあるが、ここでは述べない。貞は岡倉仲の姪、秋水の従妹である。

秋水の妻梅は昭和四十三年、九十三歳まで生きた人だが、筆者の母に、天心家との交流がなくなった理由として、この、和田三郎の件らしい事を挙げたそうだ。

それだけが理由なのかと言うと、そうではないだろう。明治三十年の時点で天心は、はっきりと新派のリーダーであつたし、秋水は明治二十九年の、日本絵画協会第一回絵画共進会を最後に、天心とは別行動をとるようになった。決定的な決別は日本美術院に加わらなかつた事で、秋水と天心が袂を分かつのは当然の成り行きだった。これが主たる理由であろう。

和田三郎の事に言及した以上、天心の三郎への配慮についても触れるべきだと思うので、紹介しておく。

天心の孫、岡倉古志郎氏の著書『祖父 岡倉天心』¹⁸（中央公論美術出版）から抜粋、要約すると、三郎は五歳の時、天心の邸内に居住していた部下の和田政養夫妻の養子として入籍した。政養が明治三十五

年病没してからは、天心は、実母の貞と結婚した早崎梗吉に三郎を託した。三郎中学二年の新学期を機に、かつて天心の忠実な部下だった剣持忠四郎夫妻にあずけた。同時に将来三郎の生活に役立つように、埼玉県下の不動産購入を依頼した。剣持が亡くなると三郎は一時、叔父由三郎宅に身を寄せ、更に埼玉県学寮に入つて高校受験に励み、名古屋八高に合格して、二年後大学に進んで医学を学んだ。

この間、明治四十一年（三郎十六歳、天心四十七歳の夏）と、四十四年の夏に、五浦で父天心と対面した。天心は三郎の行く末を気にして、物心両面にわたつて誠実な態度を貫いたという。

さて、明治二十九年十二月、秋水は学習院に就職した。当時の職員名簿には、

教授

図画（中、初）

正八位 岡倉 覺平

辞令簿では、「十二月一日、助教授の任務を囑託、月俸三十円、初等学科・中等学科で和様画を教える」となっている。和様画とは日本画のことである。学習院教職員の採用は、当時縁故に限られていたもので、どのような縁故を頼つたのかに関心が向けられる。学習院史名簿の中に、兄の一郎（独逸語）、覺平、叔父（勘右衛門の福井時代の三女仙の夫）の岡倉真範（英語）が並んでいるので、一郎と真範の推薦によつたものと思われる。

この学習院勤務は、大正三年四月までの十八年間、秋水の生活と活動を支えた。三十一年には佐賀県出身の中村梅と結婚（秋水三十一歳）

して、この間に長女数世と次女菊世をもうけ、明治三十八年には、長男輝夫が生まれた。日露戦争の最中だったので、軍が光ると言う意味だそう。この輝夫が筆者の父で、本稿の貴重な資料となった「わがおいたちの記」を残した人である。この、「おいたちの記」に秋水が再び登場するのは大正三年以降になるので、それまで、暫くは文献等に頼らなければならないが、明治二十九年以降秋水の名はほとんど登場しなくなる。

女子高等師範、学習院と、図画教員を続けているのは、普通教育のなかで毛筆画教育を広めてほしいと言う、天心の要請を受けて始まったことだったが、その目的は達成されたのだろうか。

美術教育の分野では、毛筆画は明治二十三年頃から徐々に鉛筆画を圧迫し始めて、二十六年から十年間に全盛時代を迎えた、との事なので、秋水と岡不崩が着任した頃はその草創期だ。女子高等師範の当時の年間カリキュラムを見ると、図画は一年時と二年時が洋画で、三、四年時が洋画と日本画の選択となっている。

画壇のみならず教育界でも、西洋画と日本画の対立があるなかで、これを例えば、一、二年時から洋画・日本画の選択とする事さえ、大変な困難だっただろう。学習院でも明治三十年頃は、洋式と和式の選択だった。

現場では絶えず鉛筆画、毛筆画の得失論が続いていたが、これらはいずれも技術論にはまり込んだ議論であって、フェノロサや天心がイメージしていた、「毛筆の筆法や筆力によって表現する芸術の観念性」

(筆者訳) のための教育論にはなり得なかった。筆者は珍しく秋水の美術教育論を発見した。

『書画骨董雑誌』第41号¹⁹⁾「日本画と西洋画と何れが小学及び中学生徒に適當せりや(其二)」への寄稿である。かなり長文なので、要約して紹介する。

岡倉秋水「教員其人にあり」

「今は東西の優劣を評する時代を過ぎて、これらをどう用いるかを考える時である。小中学校のような普通教育では、どうすれば図画教育の目的が達せられるかが問題であって、毛筆も鉛筆も適宜使い分けべきである。小中学校の図画の週時数は一時間で、これでは図画科の目的を達することは難しく、図画教育を熱心に研究しようとする人が少なくなる原因にもなっている。――中略――結局自分の考えでは、教員その人を得れば東西いずれでも良いと思う。然しその教員の資格は、実力と教養があり、授業法に精通し、美術に深い経験を積んでいる人である。しかし現在このような人がなかなか得られないのが実情である」

その他、子爵金子賢太郎「日本人は洋人に変せず」、松林桂月「和洋何れにても可なり」、田中頼章「日本画は荷が勝ち過ぎる」、荒木十畝「成るべく日本画」、川合玉堂「塗るには西洋画」、などが記載されている。ここでの秋水は、日本画の優位を説くのではなく、美術教育の道理を語っている。大正時代になると、山本鼎が自由画教育運動を起し、技術主義を脱して表現を重視するようになるが、秋水もその過渡的な意見を述べているのがおもしろい。

教育者としての秋水は、明治二十四年から三十四年の間に、毛筆画の画帖(教科書)を七冊出版し²⁰⁾、さらに講演も行っている。それらの

記録が、今日も教育関係機関には残っている。

日本画界で、新派、旧派の対立が深まる中で、秋水は明治三十三年金子賢太郎を会頭として、小林呉橋、諸星成章らとともに日月会を結成し、自宅を事務所にして代表幹事になる。明治四十年の文展の審査員を巡っての混乱の時に、旧派の諸団体が連合結成した正派同志会に、日月会の名も見えるので、紛れもない旧派である。一方、日本美術院を筆頭に新派の諸団体は、天心を会頭にして国画玉成会を結成して対抗した。

明治四十年の第一回文展には正派同志会の画家たちが出品を取りやめ、翌年の第二回文展には国画玉成会が出品を取りやめて、それぞれ独自の展覧会を開催した。²³ 第三回展では、両派折り合って統一をしたが、一連の対立劇を通して、新派の作品の生新さが、圧倒的な評価を得た、ということである。『日本美術院百年史』では、このときを指して「新派の勝利」と謳っている。

日本画壇での決着がついた以降も、秋水は今までとかわりなく、学習院に勤めながら、旺盛に制作をつづけ、狩野芳崖の鑑定家にもなった。学習院退職後は『芳崖先生遺墨大観』、『芳崖先生遺墨全集』を刊行し、経済的にも不都合のない生活をおくった。これ以後は、輝夫の「おいたちの記」をもとに、人間秋水を追ってみよう。

秋水の兄一郎は、大正の始め頃には中央大学のドイツ語の教授をしていて、当時の四谷区内藤町一番地に転籍して、妻たまき（環）、母の仲と暮らし、同じ敷地内の別棟には、杉原氏に嫁いで夫と死別した妹のゆりと、息子の信一母子が暮らしていた。

小学四年生の、秋水の長男輝夫は、土、日曜日や夏休みには、この叔父の家によく遊びにいったそうだ。省線の万世橋駅で乗車して神田川に沿って走り、水道橋、市ヶ谷、四谷、トンネルを経て信濃町、千駄ヶ谷で下車すると周囲は全くの田舎風景だったと言う。左手に新宿御苑の森を見ながら、ひどい砂利道を歩いていった、と言うことで、この輝夫自身についても、当時のことが克明に記されていて面白いのだが、秋水からはずれるので割愛する。

一つ付け加えるならば、岡倉一雄氏は『岡倉天心をめぐる人々』の中で、秋水の母仲を、「母のなか女はおそろしく気の勝った女で、自分が岡倉の姓を名乗っているだけに、息子のふたりに岡倉の自家などと記させ、えらくなった天心を脅かすつもりで手紙をよこすなどしていた。」²⁴と書いているが、これは明治二十七、八年の頃で、大正二年に孫の輝夫が目になっているのは、「祖母の仲子は八十歳近く、白髪を茶筌髷にして、色白の顔にいつも柔和な笑みを湛えていた」²⁵そうである。

秋水が長く暮らした家は神田淡路町一丁目一番地にあった。現在その付近をたどってみると、外堀通りと靖国通りの交差する淡路町交差点を、昌平橋にむかつて少しすすむと左に観音坂という上り坂がある。坂をのぼって本郷通り（ニコライ堂の通り）にでる一つ手前の道を左に入る。右手は龍名館という大きなホテルの裏側になるが、そのあたりだ。秋水が住んでいた頃も、龍名館はあった。

輝夫の回想だと、秋水宅と龍名館は背中あわせになっていた。

・・・だから私の家の物干し台の干し物がお客の部屋からみえて困ったのだろう、ある日番頭が桃を手みやげにもつてきて、干し

物をなるべく低くしてもらえないかと、頼みにきたことがある。番頭が帰ったあとで、「干すのはこっちの自由だ、構わないからもつとどんどん干してやれ」お酒で顔を赤くした父はえらそうにそう言っていた。その後も物干し台にはお腰やサル又がこれ見よがしに風に翻っているの、龍名館の方でも諦めたのか、塀の上に高い見えかくしをとりつけた。そんなことで龍名館と我が家との付き合いは、どうもしっくりしなくなつて、その後も地境いのこと互いに悶着が持ち上がった。その時も父は青写真を片手に現場の寸法を測つたりして、龍名館側の言い分を認めようとしなかつた。その後互いに何もいわなくなつたところを見ると両方譲りあつて解決したのだろう。・・・

第一次世界大戦（一九一四・大正三年）が始まつて、日本もドイツを相手に参戦したが、世の中は軍需物資の輸出で好景気となつた。その後も好景気が続いたことで、秋水の日常はいそがしくなつた。以下は大正五年頃の様子である。

・・・淡路町の家の造りは一部二階建てで、地震に備えて屋根はトタン葺きだった。二階が十二畳の画室で、半分を板敷きにしてそこで絵を描き、残り半分は畳敷きで、そこで客に應對した。そこには客から贈られた大きな熊の皮と、虎の皮が敷いてあつた。父への訪問者は、画商や絵の依頼者、狩野芳崖の絵の鑑定を求めにくる人達で引きも切らず、まさに先客万来といった有様だった。

二階で父が一人の客と対談している間に、階下の座敷では次の

客が二人も待つていっているとつた具合であつた。・・・

・・・明治画壇に名を残した狩野芳崖は、父の師であつたが惜しいことに明治二十一年、六十一歳でこの世を去り、谷中の長安寺に葬られた。・・・「芳崖先生がもつと長生きしてくださつたら覺平も出世したろうにのう」と祖母が私に洩らしたことがあつた。「先生はおまえのお父さんには特に目をかけて下さつたのだよ」とも言つた。そんな関係から狩野芳崖の遺作品は、父の鑑定書がないと、真筆として通用しなかつた。

直接に芳崖の掛け軸を父のもとへ持ち込む者や、小包で送つてよこす人もいた。私は父がそれらの品を鑑定するときは、興味をもつて父のそばで眺めたものである。

父は掛け軸をスルスルと広げていつて、絵の上部がちよつと現れると、「あ、これは駄目だ」と言つてまた、スルスルと巻き戻してしまふことが多かつた。絵の工程まで広げて見るのはまだよい方で、（ほとんどは上部だけで終わった）全部を広げてみる時は見込みが多少あるのだつた。それでも念のために虫メガネで落款（雅号の印）や署名を見て、「やはり駄目だ」と言つて巻き戻してもとの箱にしまった。

父が全部ひろげた絵をじつと見据えていると、私はこれはホンモノかなと思つた。父は虫メガネで落款や署名を確かめると、私に母を呼びにやらせた。母がくると父はホンモノと断定する理由をしきりに説明した。この様にホンモノもたまには持ち込まれたのである。・・・

次は日月会か、あるいは狩野忠信と興した狩野会の事だろうと思われる記述である。

・・・父は芳崖のもう一人の弟子で、本多天城という画家と画会を時々開いた。会場は小川町の多賀羅亭（洋食屋）の二階と、上野不忍池の弁天様の離れ座敷を交互に使用した。そんな時、母も私もお茶汲みその他客の接待に狩り出されたものである。

次は大正六、七年頃、どの展覧会かは分からないが、制作のようすの回想である。

・・・ある時父は展覧会に出品するため、大作にとりくんだことがある。その構図は、滝の前の岩のうえに、不動明王が仁王立ちに立っていて、その足もとには、滝からおちる奔流が渦を巻いて流れている、といったものである。大きさは、立てかけて天井につかえるほどであった。父は奔流を描くのに苦労したらしくその下書きだけでも大変な枚数であった。父はどうしても気に入らないので、夏の最中、一人で塩原温泉へ行き、旅館から弁当持ちで、地下足袋、ゲートル姿で箒川の激流を追ってその写生に余念がなかった。

時々、写生した数枚の奔流の絵を母のもとへ送ってきて意見を求めたりした。

それほど苦心した出品作も、遂に父は気に入らないで出品せざるにおわってしまった。それは私の中学二、三年頃だったと思う・・・。

秋水は大正の半ばに、狩野芳崖の集大成である遺墨集を二度にわたって出版した。この事業について一般の記録はなく、世に知られていないので、これも紹介しよう。

一、『芳崖先生遺墨大観』上巻（乾）・下巻（坤）

大正六年十一月四日発行 編者 岡倉覚平

同 狩野政次郎

発行所 西東書房

正価 貳拾五円

二、『芳崖先生遺墨全集』上巻（乾）・下巻（坤）

大正十年三月一日発行 東京美術学校編纂

著作兼発行者 岡倉秋水

印刷者 七条憲三

印刷所 金属版印刷所

発行所 西東書房

定価部部（貳冊） 八拾円

・・・今ひとつ父の一生一代の大仕事について話してみたいと思う。狩野芳崖の真筆の所有者は、北海道から九州にいたるまで、ほとんど全国に亘っていて、中には外国に所有されているものも数幅あった。父はこれらの絵がいつの世にかは散佚して、所有者も不明になることを、いたく心配したのと、一般の人にも芳崖の絵を広く紹介することが、師の恩に報いる道でもあると思つて、「芳

崖先生遺墨全集（遺墨大観のこと）」なる本の発行を思ったのである。

それは生やさしい仕事ではなかった。

父は神田佐久間町にいる七条憲三という懇意な写真家を伴って、芳崖の絵を撮影する旅にでたのである。北海道から近畿、中国、九州まで脚をのばして、所有者を訪問して、その絵を写真にとった。

どの位の歳月を要したか覚えてはいないが、全国行脚から帰った父に、旅行中の苦心談を聞いたことである。……

この遺墨集は、現在も筆者宅に、『遺墨大観』上巻一卷が欠けた状態で、合計三巻保存されている。唐表紙という唐獅子模様のある布製の表紙で、上、下巻あわせて3キロほどの重さがある。続いてさらに面白い後日談がある。

……当時中学四年生（十五歳）だった私は、父の仕事を手伝うつもりで、東京市内在住の予約者の家をまわって、代金を集めたことがあった。世間では父のこの仕事を、営利的に発想したものであるとして、「秋水は芳崖の骨までしゃぶっている」と言っている批判する者も一部にあった。然し確固たる信念のもとにこの大仕事を完遂した父は、「言う者には言わせておけ」といつて一向に気にしなかった。

大正三年に学習院を退職した時、秋水は四十七歳で、それ以後自分

の道を歩む傾向を強めていった。主にその頃の様子を長男輝夫の「おいたちの記」に描かれているのだが、大正十二年九月一日の関東大震災によって、淡路町の家が灰燼に帰ってしまう。

それ以後についても輝夫は記録を残していたが、筆者の過失によって、そのノートを行方知れずにしてしまった。やむを得ずノートを読んだ記憶と、父（輝夫）から聞いたことを思い出して、秋水伝を続けることにする。

大地震の時、家は大破を免れたが、火災は免れない様子なので、急いで荷物をまとめ、避難する段になって、秋水はどうした事か縁側にあぐらをかき、はんぺんを肴に酒を飲みだしたそうだ。多くの思い出しに別れを告げていたのだろう。いよいよとなつて腰をあげ、家族とともに避難者の群れの一員となった。大八車を借りたようにも聞いているが、震災以前の遺品が現在も多少あるところを見れば、そうだったのかも知れない。

避難する途中、朝鮮人と断定された人が、自警団に殺害されることも目にしたそうで、比較的平穏な暮らしをしていた一家には相当なショックだっただろう。

何軒かの知人を頼つたあと、妻梅の両親がいる京都に行く事にした。梅の実家は京都市左京区岡崎にあつて、父の中村章重、母志津の二人暮らしだった。秋水一家はある日の夕刻たどりついた。何の連絡もとれない当時、両親は、秋水一家は死んだものと思つていたらしい。そこへ汽車の煤で汚れ、やつれた顔の一家が、暗くなつた玄関に入ったものだから、応対にでた母志津は、一声「ンマー」と言つたきり腰を抜かしてへたり込み、必死に手を振りながら「アシ、アシ」と言つ

たそうだ。幽霊とみまちがえて、脚を見せろと言う意味だったらしい。

五、京都時代、戦後再び東京へ、思い出、終焉

京都に移住してからの秋水については、輝夫もあまり多くは書いていない。年も五十五歳、叔父天心もすでに亡く、未曾有の災害に遭遇して、何らかの心境の変化もあったと思われる。この頃は、次男の富夫の進学や、三男隆夫、三女重世の養育もあって、一家を支えることが生活の中心になったのかも知れない。伝統を誇る京都画壇のなかに、再挑戦して入って行くなどとは思わなかったであろう。東京の旧知と連絡をとろうにも、相手もどこに居るか分からない、という状況もあっただろう。『日本美術院百年史 上』、作家評伝²⁶で、秋水は没年不明になっているが、それは震災直後に転居したこと、公に名が出るような活動をしなくなった事によるものだろう。

しかし絵を描かなくなったのではない。現存する山水画や武者絵、軸物、薄紙に描かれた膨大な画稿やまくりは、記入された年齢と、記入がないものでも、父輝夫の、生前のはなしから、京都時代のものもある事は明らかだ。絵を描けば売れるという状態と、狩野芳崖鑑定の第一人者の地位は、京都時代も維持していて、これで一家を養っていたとおもわれる。

昭和六年に兄の一郎が六十七歳で亡くなり、東京港区麻布十番の善通寺に岡倉家（天心家とは別）の墓を建てた。秋水はその隣に自分でデザインした岡倉分家の墓をたてた。円柱形で、上部が一担くびれた

形の墓標で、周囲とは印象がちがうので、遠くから見つけやすい。いずれは東京にもどり、ここに骨を埋めようという決意があったのかも知れない。

前年に伊丹の紡績会社に就職した長男輝夫が結婚し、次男の富夫は東京の芝浦高等工芸学校に学んでいた。

昭和七年四月二十九日には天長節（天皇誕生日）参賀のために上京して、昭和天皇から、学習院初等科時代の恩師として、お言葉をいただいた。翌日、神田神保町の三宅写真館で記念写真を撮ったが、裏書きには寛平六十六歳（数え年）の記入がある。

当時東京青山の高樹町に長女の数世夫妻がいて、上京の折にはそこを利用したとおもわれる。

太平洋戦争直前の昭和十五、六年には、三男隆夫はその高樹町の家から立教大学に通学し、長男輝夫は鐘紡南千住工場に勤務となり、京都には、すでに義父母は没していたので、秋水夫妻と三女の重世のみとなった。

写真や親戚のはなしから、京都では、井峰^{いみね}という料亭を懇意にしている、何かの折りによく利用したらしく、そこでの写真が多く残っている。中には、大きくなった息子、娘達と、芸妓、井峰の家族に囲まれた秋水が、にっこり笑っている写真もあり、戦時にもかかわらず優雅な暮らしをしていたらしい。

だが昭和十九年九月二十四日、学徒出陣で海軍航空隊に入隊していた隆夫が比島方面で戦死した。高樹町の数世は子どもができない内に夫が死亡して、一人住まいをしていたが空襲で焼け出されて、京都の家に避難した。しかし、輝夫は三月十日の東京大空襲にもかかわらず

大きな被災をまぬがれ、南千住の鐘紡社宅は無事だった。

昭和二十三年四月、秋水は妻梅と二人の娘をつれて、荒川区南千住鐘紡社宅の長男輝夫宅に引越してきた。私が六歳の時で、小学校から帰って階段の下から二階を見上げると、着物姿の長身の祖父が笑いながら私を見下ろしていたのを覚えている。

二階の廊下つきの一部屋が一家の部屋で、下に輝夫の家族五人が住んでいた。ずいぶん手狭だった。私は祖父がいる事が嬉しくて、よく二階にあそびに行った。荻窪に住んでいた富夫が頻りに訪ねてくるようになり、家族で来たりした時は、大変な賑やかさだった。

またある時は、宮地さんという、かつて淡路町時代の弟子だったという、剽軽な話し方をする男の人が訪ねてきて、祖父をまえに面白おかしく話をして、祖父も気分よさそうに笑っていた。

部屋は荷物でいっぱいだったが、本当はまだまだあつて、会社の倉庫にも保管してもらっていたそうだ。

祖父は座敷芸のような事をよく知っていて、ある時、障子で影絵をみせてくれた。手首を下へ曲げて、上に三角に折った紙をのせ、親指と小指で着かなにかを水平に支えて、後ろから光をあてると、蓑を着て笠をかぶった人に見える。鳥獵師が捕りもちのついた竿を突き出すさまを、芝居がかった口上をのべながら演じてくれたのを覚えている。

またある時、学年は覚えていないが、私のクラスで紙芝居をやることになり、私が宿題で絵を描くことになった。その中の、子どもたちが集まっている場面を祖父が描いてくれたのだが、登場する子どもたちが、学習院の制服のような黒い詰襟服姿なので、雰囲気は異様で、

私は非常に困ってしまった。母が先生に事情を話してくれたらしく、紙芝居は波乱なく終わったが、祖父が廊下から見ているようにも思われ出される。

戦後は、価値観の転換からか、西洋画が急に広まってきて、ある日勤めにでていた娘がピカソの絵のつた雑誌を買ってきて祖父に見せていたが、祖父は深刻な顔をして、しきりに「わからない」を繰り返していた。

兄の話では、祖父は京都の家を三十万円ですべて上京したが、物価が目を追って上昇して、当初の価値がなくなってしまったと言う。

祖父とは三年近く一緒にいた筈だが、私の実感は一年くらいだ。

ある日、祖父のまえで、私がとり止めのないおしゃべりをしていた時、祖父は何も言わず、遠くを見るような目で私の様子をじつと見ていた。そして最後の思い出しは、二階で家族や親戚が集まっている所に母に連れていかれ、布団の上で目を閉じて長々と仰臥している、祖父の姿を見た事だった。

昭和二十五（一九五〇）年十二月三十日享年八十三歳、老衰。

葬儀にあたっては昭和天皇より御花料を下賜された。

華山院釈秋居士 港区麻布善通寺の自らデザインした墓に眠る。

註

- (1) 二〇六頁、「3旅館業」。
- (2) 『日本美術院百年史』一巻上、四三七頁、註(6)
- (3) 『日本美術院百年史』一巻下(資料編)、四一頁。
- (4) 『日本美術院百年史』一巻上、「鑑画会」四四一、四四二頁。

- (5) 明治二十八年十一月。
 『新編女子習画帖』 明治三十四年
- (6) 『東京芸術大学百年史 東京美術学校編』、一〇六頁。
 (7) 林曼麗著『近代日本図画教育方法史研究』東京大学出版会、五一頁。
 (8) 『日本美術院百年史』一卷上、四四二頁。
 (9) 検索サイト、グーグル。
 『日本美術院百年史』一卷上、四二二頁。
- (10) 『日本美術院百年史』一卷上、四二六頁。
 (11) 同前、四二七頁。
 (12) 同前、四二八頁。
 (13) 同前、四二九頁。
 (14) 同前、四三〇頁。
 (15) 同前、四三一頁。
 (16) 同前、四三二頁。
 (17) ① 『岡倉天心をめぐる人びと』二〇六頁上段「6八杉直」
 ② 『五浦論叢』第6号(一九九九)二六頁、岡倉由三郎一家の
 写真の中に、八杉直が写っている。
- (18) 六〇頁～六五頁。
 (19) 明治四十四年十月号。
 (20) 『彩絵入門』 明治二十四年、二十五年
 『高等小学毛筆画帖』 “三十二年
 『新撰日本習画帖』 “三十二年
 『帝国習画帖』 “三十二年
 『尋常小学習画帖』 “三十四年
 『高等小学習画帖』 “三十四年

『新編女子習画帖』 明治三十四年

(21) 講演記録「毛筆画に就いて」『教育公報』第二〇〇号、明治

三十年九月二十日、

二〇一号、同三十年十月五日、

二〇二号、同三十年十月二十日、

二〇六号、同三十年十二月二十二日。

(22) 国立教育研究所附属図書館(在目黒)

※(20)～(22)については、茨城大学の金子一夫教授より情
 報を提供していただいた。

(23) ①斎藤隆三『岡倉天心』一八九頁～二〇〇頁、「文展開催と国
 画玉成会」。

②インターネット検索サイトによる。『近代日本画の歩み展図
 録』(明治後期の日本画界)一九八三年九月。

(24) 二二頁一四行目

(25) 『日本美術院百年史』一卷上、四四九頁に該当する記述がある。

(26) 『日本美術院百年史』一卷上、六二九頁、但し目次には没年が
 載っている。

※その他参考とした資料等

・村松梢風『近世名匠列伝(狩野芳崖)』(改造社)

・『芳崖先生遺墨大観』付属冊子、横山健堂による『狩野芳崖』

・金子一夫教授より、著書『近代日本美術教育の研究 明治時代』の
 抜粋コピーを頂いた。

・小泉晋弥教授より教示を得、『日本美術院百年史』の抜粋コピーを
 提供して頂いた。

岡倉秋水年譜 (明治初期は慶応四年八月を明治元年、明治五年十月二月を新暦にして、明治六年一月となった)

明治二十六年 四月 二五 第二回青年絵画共進会審査員
 二十七年 四月 二六 女子高等師範依願解職
 同年 五月 二六 第三回青年絵画共進会二等、審査員

慶応三年十二月十一日生まれ、福井市老松下町

住す

明治 三年 春 満二才この頃一家で東京に移住か

二十八年 四月 二七 第四回青年絵画共進会審査員

十一年 四月 一〇 東京外国語学校仏蘭西語学部入学

二十九年 九月 二八 日本絵画協会第一回共進会二等

十三年 九月 一二 同校退学

二十九年十二月 二八 学習院助教になる

同年 九月より 一二 狩野芳崖に学ぶ、秋水と号す

三十一年 三月 三〇 天心、東京美術学校長非職

十六年 一五 フェノロサに美学を学ぶ

同年 十月 三〇 天心谷中に日本美術院創立

同年 九月二十日 一五 父寛裕病没

同年十二月 三〇 中村梅と結婚、神田淡路町に居

十八年 九月 一七 第一回鑑画会大会四等

住す

十九年 四月 一八 第二回鑑画会大会四等

三十二年 三二 長女数世出生

二十年 四月 一九 全国宝物取り調に参加、京都・奈良・紀州を巡る

三十三年 三三 小林呉橋らと日月会結成

二十一年十一月五日 二〇 狩野芳崖師病没六十一才

三十五年 三四 次女菊世出生

二十二年 二月 二二 東京美術学校入学 (第一期生)

三十八年 三七 長男輝夫出生

二十三年 二二 楠正成像凶案に当選

四十年 三九 日月会、正派同志会に結集

同年 四月 二二 第三回内国勸業博覧会三等

四十三年 四二 次男富夫出生

同年 七月 二二 岡倉覚三の要請で美術学校退学

大正 二年 九月二日 四五 岡倉天心死去

同年 九月 二二 女子高等師範に毛筆画教員として着任

三年 三月 四六 三女重世出生、第一次世界大戦

二十四年 九月 二二 日本青年絵画協会発足中心メンバーとなる

四年 四月 四六 学習院依願解職

二十五年 十月 二四 第一回青年絵画共進会審査員

六年 四月 四九 次女菊世病死

二十四年 九月 二二 日本青年絵画協会発足中心メンバーとなる

六年 六月 四九 『芳崖先生遺墨大観』出版

二十五年 十月 二四 第一回青年絵画共進会審査員

八年 三月二日 五一 母仲死去

二十五年 十月 二四 第一回青年絵画共進会審査員

同年 五月 五一 三男隆夫出生

- 大正 十年 三月一日 五三 『芳崖先生遺墨全集』出版
 この頃芳崖師の鑑定家として活躍する
- 十二年 九月一日 五五 関東大震災罹災、後日京都の妻梅の実家に転居
- 十四年 五七 三男隆夫岡倉仙と養子縁組
- 十四年 五七 長男輝夫、伊丹紡績に就職か
- 昭和 六年 六月 六三 兄一郎死去六七才
- 八年 六五 次男富夫家具デザイナーになる
- 十六年十二月六日 七三 太平洋戦争始まる
- 十九年 五月十七日 七六 三男隆夫比島沖で戦死
- 二十年 八月十五日 七七 終戦
- 二十三年 四月 八十 東京南千住長男輝夫宅に転居
- 二十五年十二月三十日 八三 老衰のため死去港区麻布善通寺に葬られる。華山院釈秋水居士

〔本稿執筆にあたっては、多くの方々のご協力を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。〕

〔おかくら ひでお／画家、元東京都公立小学校図画工作科専科教諭〕

福井岡倉家の系図

